【令和元年度 県外研修会参加等助成事業 研修報告】

「第105回　全国図書館大会」

加嶋　辰史

伊勢神宮を擁する三重県より、平成26年以来6年ぶりとなる、地方での図書館大会は、令和新時代をテーマに開催された。

初日:開会式の中で、大会会長の鈴木英敬（ｽｽﾞｷｴｲｹｲ）三重県知事から、サブテーマにある常若という言葉の説明がなされた。 基調報告では、小田光宏　日本図書館協会理事長から、図書館を取り巻く1年を振り返りがなされた。ニューヨーク公共図書館を題材にした映画の作成、または図書館員を描いた小説・物語の多さ、活字文化議員連盟による答申：「公共図書館の将来：「新しい公共」の実現をめざす」2019.6.24　や『朝日新聞』社説2019.7.30　『読売新聞』社説2019.2.17などから（１）図書館への関心の高まりと観点の広がり、を考察された。また、（２）障害者サービスの展開、（３）法改正の進展　の報告もあった。大会記念講演では、三重大学人文学部教授吉丸雄哉（ﾖｼﾏﾙｶﾂﾔ）氏を講師として行われた。氏からは和本の研究テーマの１つとして、地域に親和性の高い忍者を扱い、三重大学付属図書館にて「伊賀と忍者」展を開催したことを聞いた。忍者と図書館の関り講演資料の中で、米子市立図書館の図書館忍者スタンプも紹介されていた。

2日目：午前、第1分科会　公共図書館（１）平成から令和に一公共図書館新時代の幕開け、午後は第1分科会　公共図書館（２）地域Ｘ書店Ｘ図書館、に参加した。

研修結果:2日目午前の**分科会に参加することにより、**拠点として期待される図書館が受けている、地方自治の影響を理解した。法改正による所管の在り方について、糸賀雅児　慶応大学名誉教授の分析は大いに参考になった。一般社会人には考察しがたいテーマを、「社会教育行政より、地方分権や規制緩和の文脈で読み解かなければならない。」「この枠組みの中でより良い図書館の運営と提供を、自治体に働きかけていくより他にない。」など、問題の本質に導く解説がなされ、参考になった。

所見、感想など:新しい実施方法の模索、新しい方向性の探求を示唆する言葉を多く耳にした。大きな流れが生まれつつあるようだ。今後も、本は人をつなげてネットワークを結ぶ性質から、出会いの創出を続けていくのだと思った。

大量消費より、本質的なことを頭で考えがちなＺ世代やミレニアム世代の学生に、足を運んでもらうためには、本業界全体を盛り上げるきっかけづくりが重要であると、地域Ｘ書店Ｘ図書館のクロストークから出た言葉は、印象に強い。